



第三十四回 姫路城

～羽柴秀吉の中国方面経略拠点～

深草 祐一

姫路城といえば世界遺産。白亜の連郭式^{れんかくしき}天守が思い浮かぶと思いますが、池田輝政^{いけだてるまさ}があの大城郭を築いたのは関ヶ原以後のこと。西国大名への押さえとして存在感を示したかも知れませんが、既に城が戦場になる時代は終わりつつありました。では、姫路城^{いくさ}が戦において重要な役割を果たすことはなかったのかというと、そうではありません。今回は、姫路城が戦国史の表舞台で活躍した時代についてご紹介しましょう。

小寺氏時代

姫路城は、赤松氏（後醍醐天皇を助け鎌倉倒幕に活躍した赤松円心に連なる一族）が姫山に城を構築したのが始まりと言われています。そして城は赤松氏の一族の小寺氏に預けられ、戦国時代中期になって小寺氏家老の黒田氏が城代となり、中世城郭が整備されたようです。この黒田氏こそ、後に筑前福岡黒田藩五十二万石の大家となる一族です。黒田氏の出自は謎が多く、^{いづこ}何処からか流浪の末に備前福岡へ流れ着き、黒田重隆^{しげたか}の代になって播磨姫路に移住して来たといえます。黒田重隆は広峰神社の援助のもと家伝の目薬を売ること財を築き、やがて近隣の地侍たちを従えるようになりました。そして、その子、^{もとたか}職隆の時代に、この地方で威勢を振っていた小寺政職^{まさもと}の信頼を得、家老に列せられるとともに、小寺政職の養女を妻に迎えて小寺の姓を賜ります。この職隆の子が後に羽柴秀吉の軍師として活躍する、^{くろだかんべえよしたか}黒田官兵衛孝高であり、そしてその子が黒田藩の祖となる黒田長政^{ながまさ}です。ちなみに「福岡」という地名は、関ヶ原の功により黒田長政が筑前博多の地を与えられて新たに城を築く時、父祖が苦勞した備前福岡を偲んで官兵衛が付けさせたものと伝わっています。

姫路城で生まれた小寺（黒田）官兵衛は、若くして父職隆から家老職を受け継ぎ、姫路城を任されました。当時の播磨や備前周辺は、比較的小規模な領主が割拠していましたが、西から毛利の圧力を受け、東からは新興の織田の

威勢が届き始めていました。天正三年（1575年）、長篠の戦いで織田が甲斐の武田を破ったとの報を聞いた官兵衛は、天下の趨勢は織田に定まったと見て、小寺政職^{まさもと}と重臣たちを説得します。そして岐阜城へ向かうと、織田信長に謁見し、小寺氏は織田に着くことを申し出ました。官兵衛からの的確な中国情勢の報告を聞いた信長はたいそう喜び、中国経略は木下（羽柴）藤吉郎秀吉なる者に任せるつもりなので、よくよく相談するように申し付けました。そこで近江長浜城^{ながはま}を訪ねた官兵衛は、羽柴秀吉とその軍師竹中半兵衛^{たけなかはんべえ}に出会うのです。

しかし、小寺が織田に着いたことを知った毛利が黙って見過ごす訳もなく、翌年、広島から海路で5千の軍勢が押し寄せます。毛利軍は姫路に近い英賀^{あが}付近の浜に上陸。英賀城主と結んで姫路城と小寺氏の本城^{ごちやく}の御着城を攻略すべく陣を張りました。多勢に無勢で御着城内が動揺する中、官兵衛は戦の指揮を任せられると、領内の百姓を総動員し、酒を出しながら打ち合わせを行いました。そして、間をおかず決死隊を率いて出撃。着陣したばかりで、まさか寡兵の小寺勢が打って出てくるとは思っていなかった毛利勢が浮足立ったところへ、後方から手に手に陣鼓、陣鉦、旗指物^{さしもの}を持った百姓衆が大音声で氣勢を上げたため、毛利勢はさらに後続軍が現れたと錯覚して一気に崩れ立ちます。そこに官兵衛率いる部隊が突撃し、散々に切り込んで毛利勢を撃退したのでした。この知らせを受けた織田信長は、小寺政職に感状を贈るとともに、官兵衛の働きを褒めたたえています。

羽柴秀吉の入城

小寺氏が織田に着くことを明確にした後、官兵衛は周辺の領主たちを説き伏せて回ります。主の小寺政職^{まさもと}が人質を出すのを渋る中、官兵衛は一人息子の松寿丸（後の黒田長政）を進んで差し出したため、周辺領主も皆人質を送って寄こしました。そして、羽柴秀吉の軍勢を姫路城に迎え入



戦略拠点としての姫路城

れると、何とそのまま秀吉に城を提供し、自らは父職隆の隠居城へ移りました。以後、姫路城は織田軍の中国方面戦略における戦略拠点として重要な役割を担っていくことになるのです。そして、秀吉から重用されるようになった官兵衛は、やがて竹中半兵衛と共に羽柴の二兵衛と称されるようになっていきます。無欲で落ち着いた雰囲気^{むとがた}の竹中半兵衛と、野心むき出しで押しつけがましいところがある小寺官兵衛とは、性格こそ違いましたが、同時に同じ策を思い付くなど、相通じるところがあったようで、竹中半兵衛は病弱な自分の後を託す存在として官兵衛に薫陶を与えていきます。

ところが、ここで暗雲が立ち込めます。一旦は織田に着くと約束した播磨三木城の別所長治が毛利に通じて反旗を翻したのです。さらに摂津の荒木村重も毛利に通じて反乱を起こすと、小寺政職も態度が怪しくなりました。荒木村重が思い直すなら自分も同意するという小寺政職の言葉に、官兵衛は荒木村重を説得すべく有岡城に向かいますが、面会もかなわず土牢に閉じ込められてしまいました。帰らぬ官兵衛は裏切ったと皆が思う中、藪蚊が群がる湿った土牢でひたすら耐え、一年以上経って陥落した有岡城から救出された時には、目を病み、頭は瘡に覆われ、足は曲がってしまっていました。この時、竹中半兵衛が半年前に陣中で没したこと、そして、人質に出していた松寿丸を彼が匿ってくれていたことを聞き、号泣したといひます。そして、療養後に復帰した黒田官兵衛（裏切った小寺の姓を改め黒田に復した）は、竹中半兵衛の遺志を継ぎ、鳥取城の兵糧攻め、備中高松城の水攻めと、できるだけ兵を殺さずに城を陥れる策を次々に実行していくのです。

そして、運命の日。備中高松城外の陣中で、本能寺での変報を聞くことになります。この時、人目も憚らず泣き叫ぶ秀吉の耳元に顔を寄せ、「ご運が開ける時がきました。

うまくなさいませ。」と囁いたと伝わり、この事がきっかけで秀吉は生涯黒田官兵衛を警戒し続けることになったと言われています。その後、急いで毛利と和議を結んだ秀吉は、世に言う中国大返しを敢行し、まず姫路城に戻ると、城中の軍資金を全て将兵に分け与え、明智光秀を討つべく、京へと駆け上って行ったのでした。この時、秀吉に、古いによれば本日は出掛けて行った主が戻らぬという縁起が悪い日ですと忠告した者があったそうです。しかし、それは却って縁起が良いと言って出発し、そのとおり、明智光秀を討って織田政権の中心に座った秀吉は、姫路城に戻ってくることはありませんでした。

その後の姫路城

羽柴秀吉が拠点として使用していた間に、姫路城は石垣を組み三層の天守を建築するなど、近世城郭として整備されたといひます。秀吉が明智光秀を討った後、姫路城には弟の羽柴秀長、次いで木下家定が入りました。そして、関ヶ原の戦いの後、山陽路の要衝にある姫路城には、徳川家康の娘婿である池田輝政が播磨五十二万石で入りました。家康から西国大名への押さえを言い含められた輝政は、当時最新の技術を用いて城の大改修を行い、豊臣時代の黒い板壁と対比される徳川時代の白い漆喰壁の天守を建造して、今に残る姫路城が誕生することになります。

いつか姫路城を訪れることがあれば、あの白い天守が建つ前の時代にも思いを馳せてみてください。縄張りに見る戦術面の工夫だけでなく、中国地方攻略の戦略拠点としての姫路城の重要性も意識すれば、歴史探訪をより深く楽しめることでしょう。



世界文化遺産・国宝・姫路城